令和5年度　福井南特別支援学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
教育課程・学習支援	学習指導要領の指導内容を確認し、その内容に基づいた指導計画を作成し、児童生徒が自分から学ぼうとしている姿勢を意識した評価をする。	教職員が学習指導要領を読み込む姿が日常化し、主体性を意識して、指導計画を作成し、評価を行った。そして連絡帳を通したきめ細かなやりとり、懇談会などでの具体的な話合いを通して、保護者に子どもの主体的に学ぼうとする姿がよく伝わった。しかし、主体性が感じられない保護者も少数ながら存在するので、引き続き主体性の引き出せる支援が必要である。	児童生徒の学習への主体性は、自立に向けて大切な意識であり、また、保護者の評価にはCもあったので、引き続き主体性を意識した評価を行うと共に、学習指導要領の指導内容に基づき、児童生徒の主体性を引き出す支援をする。
人権教育・生徒支援	（異性とのかかわりを含む）人とのかかわり方やインターネットの使い方についての支援・指導を行い、いじめやトラブル防止に努める。	インターネットに関する情報を全教員に周知・家庭に配布した。小学部では共通教材を作成して授業で活用した。中学部ではメッセージで教員に呼びかけを行った。高等部では長期休業前後の生活指導や生単の授業で取り上げ、生活チェック表を活用し日々の生活の中でも指導にあたった。	今後も引き続き、有効な情報や教材を提供したり生活チェックを定期的に実施したりして、トラブル等あったときには学部に周知し、クラスで話題にするなど呼びかけを行う。
	学校から情報を発信したり、児童生徒の支援策を保護者と考えたりするなど、家庭と連携して支援・指導を行う。	多くの教員が人とのかかわり方やインターネットの使い方について積極的に支援・指導を行った。保護者に対してはインターネットに関する情報のチラシを家庭に配布したり、家庭でのルールを親子で考えてもらう機会を作ったりした。また、異性との交流について学部便りで注意喚起を行った。今後も家庭への啓発や連携の必要性を伝えていく必要がある。	今後も引き続き、教員が活用できるように有効な情報や教材を提供する。教員の意識を高めていく。また、人とのかかわり方やインターネットの使い方を家庭で振り返り考えてもらう機会を設けていく。有効な情報や取組を定期的に学部便りやHPに掲載することで、家庭へのさらなる啓発を図る。
進路支援	希望調査や説明会、相談会といった進路関連行事のほか、生活や学習活動など、学校生活のあらゆる場面において、児童生徒の卒業後の生活を意識した支援を行う。	進路実現を意識した支援の実践は、今年もほぼ全ての教員が行ったと言える。保護者に対しては、昨年と同様に様々な機会を通じて、児童生徒の進路実現に関する情報を提供することができた。小学部や中学部において、一部の保護者には情報提供が十分にはできなかったと言える。	進路希望調査の結果や保護者懇談会の内容について、担任教諭と連携して情報共有を図る。また進路ガイドブックの内容を刷新し、よりわかりやすく情報提供を行う。保護者の抱く希望や不安を把握し、適切に情報を提供する。
	高等部での産業現場等における実習が、進路選択の参考となるように充実させる。	前年同様に実習の準備や振り返りを行うなかで、教職員間の連携を深めることができた。生徒に対しては、産業現場等における実習を経験することによって、進路選択について考える機会を設けることができた。	テクノパーク実習を廃止して、1年生B課程生徒の事業所実習を行う。また職場見学の開催時期を早める。それらによって進路実現に向けた意識の醸成を合理的に図る。
保健・安全	社会の状況を踏まえながら教職員一人一人がセクシュアリティ教育について理解を深め、学部舎で児童生徒に応じた指導や支援を行う。	教職員に対し、夏季休業中に全体研修とグループ研修を行い、包括的セクシュアリティについて見識を広め、少人数で話し合うことで他者の考えを知り多面的に捉えるきっかけになった。生徒に応じた性教育の取組に対する成果が現れた一方、一部の生徒から性教育に戸惑いを感じているという声があった。	次年度も教職員を対象にした研修の機会を設け、性について教職員で話し合える環境を継続させ、学校全体でセクシュアリティ教育に取り組む。生徒に対しては、個人のプライバシーや人権に大きくかかわる内容を慎重に扱う。生徒が性教育の授業を受けるかどうかの意思を尊重したり、可能な範囲で個別にフォローしたりする。
	家庭に向けた発信を行い、家庭からのニーズを把握する。	性教育の取組について通信や連絡帳を活用することで保護者からの相談や感想などが寄せられ児童生徒への支援に生かすことができた。性教育について通信や連絡帳を通して学校での取組や子どもの様子が分かったと回答する家庭が7割弱ある一方で、学校での取組について知らないと回答する家庭も一定数あった。	各教科の年間計画に位置付ける際に、できる範囲で指導内容や実施時期を明記し共通理解を図れるように、他教科に渡った性教育に関する年間計画を整理する。実施する性教育の指導内容を教員が共通理解し、連絡帳等で家庭に伝えていく。その他、今年度同様に学部だよりやこころ＊からだ通信でも発信する。
ICTの活用	児童生徒の学びを充実させ生活を豊かに送ることができるようなICTの活用方法について検討する。	学部研究会等を通して、ほとんどの教員がICT利用に関する情報共有や使い方の検討を行うことができた。教員相互参観週間の授業一覧を改善することで、他クラス・他学部のICT活用場面を見る機会にもつながった。保護者に対してはICT通信を3回発行した。校内の取組やICT利用に関する情報を掲載した。通信のアンケートで「参考になった。」と回答した方もいるが、反応はあまり多くない。	アンケートの中に「一人一人の発達段階を把握した活用があまりできていないと感じた」との意見があった。来年度は学部ごとにグループを作り、グループごとにテーマを決めて研究を行う。児童生徒の発達に合わせたICTの活用方法を探れるよう、研究を進める。保護者に対しては、来年度もICT通信を発行して学校の取組を発信していく。また、通信を学校HPにも掲載し、情報が保護者の目に届きやすいようにする。
	ICTを活用できるよう、教職員の資質能力の向上を図る。	2回の研修会を実施し、各学部に適した内容の研修を行うことができた。来年度は教職員に対して一人一台の体制が構築できなくなりハード面の絶対数の確保が課題になる。	学校教育DXの推進を図る上で、学校内の研修にとどまらず教育研究所が開催する研修等を利用して個人のレベルアップをする。